

## The continent, 八木と、OOQO

### 展示の経過

(当日トークイベント、配布資料改変)

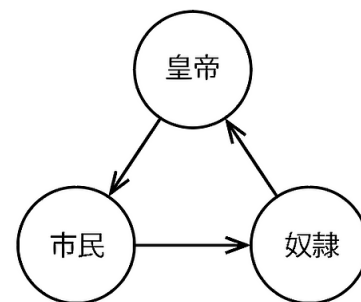
今回の展示は、岡本、鈴木、八木、鐘ヶ江の4人によって当初企画されたものだった。メンバーはそれぞれに役を持ち、一つの役としてその関係を構築するために作品を作ることを模索した。そして、それらの関係性から様々なオブセッションや、バイアスを創出し、連鎖させていくためのことを目指した。

### 初期、構想

役は当初、(皇帝)、(市民)、(奴隷)という3つである。奴隷は皇帝になにかしらの反乱を仕掛けることができるというルールを設けていた。

以降、細部の扱いが変わりながらも、この三棘みの構造は最後まで残るが、想定したような"なにかしらの反乱"や、オブセッションにまで至るような互いの関係性を取り出すことはできなかった。

この頃から、(皇帝、市民、奴隷)は、(SF、市民、肉)と呼ばれ始め、それぞれに別のあり方に置換されていく。



### 実験1

「優美な死骸」というシュールレアリズムにおける実験を参照した。本来は共通無意識を取り出す目的の実験である。わずかにはみ出す隣のグループの絵にそごうような形で、その絵の続きを描いていく。しかし、ここで私たちが捉えようとしたのはむしろ、相互誤認的な関係性の現れについてであった(図2)



### 実験2

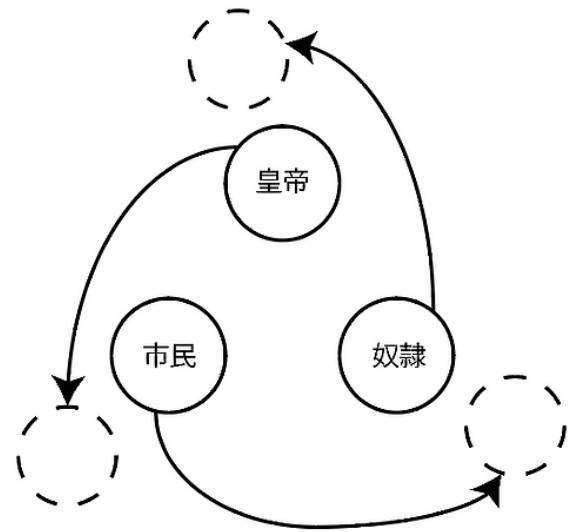
グループ展のシステムの作家への具体的な拘束力が規定できないことが問題となっていた。そこで自分たちがほとんど手を加えることのできない、いわば外部的なシステムによってそれを規定することはできないかと考えた。そこで行ったのがキットを作成し、アリを飼うということであった。

(SF)は餌を、(市民)はアリを、(肉)は草を補給することができるというルールを設け、キットの様子を日記として記録していこうと考えたが、結果、アリの発育は全く観察されなかった。



### 第3段階 相互誤認的な

この頃、私たちはお互いの情報交換を極端に減らしていった。限られた情報の中で、他の役の動きを、またそれらの関係性を想像し合うような関係へとシフトし、三竦みの影にそれぞれのメタの領域を膨らませていった。



### 第4期 情報統制・宮川、濱田の参加

宮川が参加する。宮川はそれぞれの役のあり方を作り直すべきであると考え、三役から一度名前を抜き取り、仮定されていたヒエラルキーを廃止する。それと同時に、三役の直接の交流は禁止され、宮川を通してのみ交流を行うことができるとされた。

濱田が、(肉)に取り込まれる形でメンバーが揃う。

SF (鈴木、鐘ヶ江)→The continent

市民 (八木)→八木

肉 (濱田、岡本)→

宮川 (宮川)

こうして、それぞれの役は、全く別の制作を始めることになる。最終的な役名である (The continent)、(八木)、(肉)、(宮川)はそれ以降に決まっていたものである。

---

(八木)



この展示の搬入を終え、何故名前が(市民)から本名である(八木)へと一周したのかを八木恵梨なりに考えました。今は(市民)が既に企画メンバーの岡本、鈴木、鐘ヶ江によって用意された役割であったことが一周した1番の要因だと思っています。

昨年の冬、企画メンバーがカーストを用いたグループ展示を考案し、真ん中に挟まれる立場の市民役として私を誘ってくれました。そこで私はまず、与えられた「市民」という役割を使ってどのように社会(グループ間でのやり取り)を循環させていくかといった「市民」の解釈からはじめていきました。このとき私が捉えた「市民」の役割とは、超常現象や説明のつかない事、生と死などの普遍的な疑問を古代の人々が神話として自分たちの生活に取り入れて文化を構築していったように、「市民」以外のグループが起こす現象を「市民」が受け取り、それを再構成して自分たちの文化にすることでした。そして、その解釈に基づいて他グループとの干渉を図っていきました。

しかし宮川さんが参加し、他グループとのやり取りが不自由になると市民としてどう立ち回れば良いのかわからなくなりました。なぜなら市民は活動の前提として他グループとのやり取りが必要だったからです。それからは制限された状況下でどう「市民」らしく振る舞うのかをより強く考えるようになっていました。他グループの刺激を「市民」の"文化形成"に繋げると

いう活動理念は、徐々に他グループを"把握"するという目標が変わってゆきました。このようにして「市民」を解釈する(八木)が浮き彫りになっていきました。[八木恵梨]

( )

私達が担うものは、このグループ展における構造が、3点のヒエラルキーを社会に似せて作られていた頃、私達が「肉」または「泥」という名前と呼ばれ、最下層に位置した頃とほとんど変わっていない。どのような形で逃れようとそこに張り付く"何かがある気配"のようなものであり、他の役がそれぞれに秩序を築き、自らをその内に閉じ込めた時、外部に退けられた(られなかった)"何者かの気配"であるとも言えるだろう。[岡本 大河]

この3グループは、ある時点でSF 市民 肉という枠組みでなく、神 八木 continent「」←名前なしとなり、ヒエラルキーではなく 相関する集団になっていたのですが、私はまだ最初の設定を少し引きずっていて、スイッチするのはなかなか難しかったので、自分のことは「」の中で、たまに素早く手を出したり引っ込めたりする、あるいは質の提供者、熱心に動く一つの個だと思っています。[濱田明李]

---

(The continent)

### 『固有の風景』

今回の展覧会で、我々が試みたのは、「固有の風景」の創出である。その結果こそが continent であることに他ならない。

当初、鐘ヶ江と私は、「SF」と呼ばれ、マッドサイエンティストとしての振る舞いを要求された。しかし、出来なかったのである。我々2人はどちらもそのような素養は無かったためだ。我々に共通するのは、ただこの世の中の雰囲気には馴染めなかった結果、ただそれだけであった。その顛末によりビデオという表現に行き着いたことは、必ずしも、冷たさや科学を表わす記号ではないはずだった。そこで考え出したのが、ゲームを作り、その中の空間を我々の展示空間としてしまうことであった。この世界を「continent」と名付け、ひと繋ぎの陸地として創ってゆく事を決めた。誰もが「仮想世界」と呼ぶ、その「仮想」の場を周到に作り込んだ時、それは仮想を超え、ある、固有の場となる。それを成し得るためには職人的技術と、長い時間が必要だった。プログラミングを鐘ヶ江が担当し、モデリングを鈴木が担当することでなんとか完成に漕ぎつけることができた。展示の趣旨としては他のグループと関わることが求められた。しかし我々はそれを拒否する事に決めた。SFという皆がよく知る記号でヒエラルキーの相関図を作っても、それでは意味がない。完全に我々にとって固有の表現の存在を示す必要があった。continent を少しづつ進めながらも、それが何であるかを一切明かすこと無く時は進んだ。

「八木」は我々を探ろうとしてくるのだが、彼女の推理は素っ頓狂で、こちらのやっている事の芯には絶対に触れることができなかつた。我々は時折ヒントとなる動画や、文章を送ったのだが、八木はそこにある意味をそのまま受け止めることができなかつた。鈴木、鐘ヶ江に対する今までの印象から、こちらに対して必要以上にトリッキーな視点で構えているのである。それは、(宮川)の策略によるもので、八木だけが(SF、市民、肉)という古典を大事に守っていた。展示会場には彼女の、間違った解釈により 生み出された絵画が多数並んでいる。結果的にそれが彼女固有の表現となることで、真のContinentとは全く別の世界の出来事の記録として機能し、展示会場の違和感に繋がっているのではないか。[鈴木雄大]

### 『この展示がグループ展であること』

展示プロセスの概要の説明は省き、まずパーソナルな視点からこの半年間を述べる。昨年冬、岡本、鈴木から展示の誘いを受ける。個人の制作を持ち寄って会場に気持ち良く並べる展示でないことの説明を受け、参加を決定。気持ち良く並べるだけのグループ展示はよく想像ができるので岡本、鈴木の話は楽しみだった。八木が参加。徐々に初期の構想のためロールが決まってくる。ロールの一部として蟻の巣を作成。音も無く蟻の巣は予想していた機能を全くなさず、放置。私はそれぞれのグループを演じるものだと認識していた。ロールであるのならどこを舞台、素人なりに演技方、どこまで演技に没入するのかを話し合う時間があるパターンも考えた。次に宮川、濱田が参加。宮川が3グループに属さないことで今のグループ構想の原型が完成した。まだ制作の取っ掛かりがなく、岡本、鐘ヶ江、鈴木で映像を作成。映像の内容は鐘ヶ江、鈴木がテレビゲームで対戦を行い勝者が一定時間自由に動作できるものだ。その映像と同時に絵画を3人で描く。2016年5月同大学内の他のグループメンバーとコミュニケーションの制限が宮川より命令。テレビゲーム、絵画がなかったことになる映像をYOUTUBEにアップ(宮川命令)。同月学校内で展示のデモ?が行われる。デモ内でthe continent宛に郵便が届く。差出人と意図は不明のまま。デモが終わり、3人で描いた絵画をthe continentがな

かったことにするように宮川が命令。絵画は無かったことになった。デモの記録映像をYOUTUBEにアップ(宮川命令)。the continentは「continent」の制作に全振りする。ここからはほぼ制作。デモ中もずっとコミュニケーションは制限され、他2つのグループの情報は知らされない。名前の呼び方も推測できても正確には把握していなかったと思う。2016年7月武蔵野美術大学内でグループメンバー全員が集まる。私はここで初めて濱田と会う。宮川ときちんと話したことは無かった。予告映像の出来事である。同月シャトー小金井に搬入。ここで初めてthe continentの作品「continent」お披露目。31日シャトーにてトークに参加。

・現実で起こってると思うことを羅列する

この展示はグループ展示である。ここでのグループとはメンバー全員をまとめて指すものでなく、各チーム単位のグループを指す。展示までの各グループとのコミュニケーション(宮川とのも含む)は最終的に出てきた展示物自体と関係がないとも言える。各グループはコミュニケーションを取りつつも最初から目的と実行する内容は変わっていない。コミュニケーションはその目的と実行の内容に感じることでない変化を与えた。コミュニケーションはその時の会話の主題とは別に、意識できないレベルの未来の方向付けがある。

先に述べた通り半年間自ずとコミュニケーションをベースにしたため、その都度の会話とは別に、個人の意識に関わらず未来の振る舞いのための選択肢を選択したということ。コミュニケーションの前提は各グループの性質、抑圧される方式。その未来とは最終段階の展示と初期構想の3すくみが判断基準となった。目的が展示、過程がコミュニケーションとなった。[鐘ヶ江歓一]

---

(宮川)

参加作家が「SF」「市民」「肉」という三つのグループに分かれ三棘みのような関係になるというシステムのもと、この企画はスタートしました。しかし三グループの認識のズレや、グループ間での過度な情報制限などから、そのシステムは破綻の一途を辿っていきます。そこで私がしたことは、それを一旦無かったこととし、三者の間にできた新しい関係を観察することでした。

「SF」であった(The continent)は、他グループと関わることを拒み続けるような態度を取り、高みへの登頂をするとい、「市民」であった(八木)はどうかして他グループのことを把握したいといいます。名前を失った者たちは「気配」や「居る」といったキーワードを掲げ、介入を試みます。

今回は展示に至るまでの各グループ間とのやりとりや映像記録をWunderkummerで公開しました。[宮川知宙]

---

一人の企画者として

すでにこの世界を満たしている現実と決して妥協せず、時にはその現実との接近や融和を楽しみながら、表現という現実を行うこと。目指したのは、未だかつて存在したことのないそのような現実を丁寧に設計し、作動させるということでした。

一つの展覧会が、一つの現実として機能するのはどのようなときか。現実、とはテクスチャの羅列であり、ある時々の視座と解像度に依存してそこに現れるものです。その羅列がたった一つ水準から捉えられる出来事、つまり事実として相対化され、その全体性へと統合される時、それはことさらグロテスクな企てに他なりません。(当然、全体性も一つのテクスチャとして立ち現れる)そういった意味で現実、事実と混同されてはいけません。

三つの役(The continent)、(八木)、( )があり、それらはそれらに対して少しの特異な役としてある(宮川)を通してしかコミュニケーションをとってはいけないこと、(宮川)の命令には従うことといったルールが設けられていました。このルールによって私たちはその視野を制限され、主観的にこの展覧会に参加することを余儀なくされました。二箇所に分散し、一望することのできない会場は、一人一人の鑑賞者を、(鑑賞者)としてこの展覧会に巻き込むためのものでした。[岡本大河]